

# 教員養成系学部に求められる情報モラル教育の授業実践

— 情報モラル教材の作成を中心として —

三宅 健次

## Teaching Practices for Information Ethics Education Required in Teacher Training Faculties

— Focusing on the Creation of Information Ethics Materials —

MIYAKE Kenji

### 要約

本研究では、情報教育に関わる背景及び教員養成系学部における情報モラル教育の現状を鑑み、教員養成系学部に求められる情報モラル教育を実践し、その効果を検証したものである。まず、改めて情報モラル教育の現状と課題を様々な視点から整理した。それをもとに、学生の実態も考慮して指導計画を作成し、授業実践を試みた。

全5回で実施した授業は、情報モラルの授業をする自信に直接は繋がらず、期待したほどの効果は確認できなかった。ただ、考えさせる教材を作成させることを通して、情報モラルの指導法について理解させることはできた。

キーワード：情報モラル教育、教員養成、授業実践

## 1. 問題の所在

### (1) 情報教育の現状

2019年12月19日に文部科学省において「GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール実現推進本部」が設置され、具体的な「GIGAスクール構想の実現」が示された。

当初GIGAスクール構想では2023年度までに高速大容量の通信ネットワークの整備及び小中特別支援学校の全学年の児童生徒一人一人に端末を整備する計画であった。それが、新型コロナウイルス感染症の影響で計画が前倒しとなり、2021年度にはほとんどの小中特別支援学校に端末が整備されることになった。これにより、教育の情報化は

一気に進み、現在に至っている。

その後、生成AI (Artificial Intelligence) の急速な普及に伴って、教育DX (Digital Transformation) が推進されるようになってきた。特に生成AIの利用に関しては子供たちにも影響があるので、文部科学省では2023年7月4日に「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」を示し、注意を促している。

このようなめまぐるしく変化する情報社会に主体的に対応し、指導できる教員の育成が急務となっている。

### (2) 教員採用の現状と教科横断的内容の課題

教育現場では世代交代が進み、学校教員統計調査によると、2022年度における小学校教員の21.7%

が勤務経験5年未満、17.7%が5年以上10年未満となっており、若い教員の割合が全国的に高くなっている。この状況は中学校教員においてもほぼ同様である。このことは、教員経験年数が少ない中でも、情報モラル教育を実践しなければならない環境にあることを意味する。情報モラル教育のような教科横断的に取り組む内容に関しては、組織的に取り組んでいくべきものであるが、現実的に実施されているところは少なく、個々の教員に任されている場合が多い。また、教科横断的に取り組む内容に関しては、実施する優先順位が低くなる傾向がある。そのため、在学中にしっかりと身に付けさせておく必要がある。

### (3) 教員養成系学部における情報モラル教育の現状

教員養成系学部のある大学で、情報モラル教育に関する授業がどの程度実施されているか、2024年度現在ネット上に公開されているシラバスで確認してみると、兵庫教育大学では「教育情報化概論」の授業の中で「情報モラル・セキュリティ教育の考え方と実践事例」として、広島大学教育学部では「教育方法・技術論及び情報活用教育論」の授業の中で「情報モラル教育と情報活用能力の育成のための指導法と指導事例」として、15回のうち1回を情報モラル関連の授業に当てていた。これらのように、初等中等教育における情報モラル教育に関して、多くの大学では1回ないしは2回の講義をしているところがほとんどであった。一方、数は圧倒的に少ないが、愛知教育大学では「情報セキュリティと情報モラル」という授業名で、東京学芸大学では「情報社会と情報倫理」という授業名で情報モラル教育に関する講座を設けているところもある。このような大学では情報モラル教育は十分に実施されているといえる。内容としては複数のケーススタディを扱っているところが多かった。

このように、しっかりと時間をかけて実施しているところはほとんどなく、これでは、教員になってすぐに情報モラル教育を実践するのは厳しい状況にある。

### (4) 教員養成系学部における情報モラル教育の指導法

西川ら(2016)は、知識や事例を紹介する事例紹介型指導と学習者に実際に体験させながら指導する体験重視型指導の2つのカリキュラムを作成して教育効果を検証した。その結果、体験重視型指導の方が教育効果があったとしている。また、佐藤ら(2017)は、情報モラルの授業を基礎的知識を学ぶ、現職教員による模範授業視聴から授業設計を学ぶ、情報モラル教材から指導案を作成するの3部構成で実施し、その授業実践の効果をまとめている。また、安里ら(2019)は教員養成課程の学生に情報モラル指導法の指導をする際の留意点として、学生の生活の経験や情報モラルの学習経験を踏まえること、「公共的なネットワーク社会の構築」を意識的に指導することをあげている。

## 2. 目的と方法

### (1) 目的

本研究では、教員を目指す学生に対して、情報モラル教育を実践する資質を身に付けさせるため、高等教育においてどのような授業が求められるのか、具体的な授業実践を通してそれを明らかにするとともに、情報モラル教材を作成させることの効果を検証することを目的とする。

### (2) 方法

改めて初等中等教育で実施されている情報モラル教育の現状と課題及び情報モラルと道德教育、デジタル・シティズンシップ教育、生成AIとの関連を整理する。

それらと学生の事前調査をもとに教員養成系学部求められる情報モラル教育の指導計画を作成する。授業には情報モラル教材の作成の組み込み、それを含めた授業実践を通してその効果を検証する。

## 3. 情報モラル教育の現状と課題

### (1) 学習指導要領での扱い

2017年に告示された小中学校学習指導要領の総則において、学習の基盤となる資質・能力として

言語能力、問題発見・解決能力等と並んで、情報活用能力があげられた。情報活用能力の中には括弧書きで（情報モラルを含む。）と記載され、情報モラルが情報活用能力の中に含まれることになった。

情報活用能力の育成に関する内容も含め、各教科等の指導にあたっては「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を求めている。このように、情報モラルに関しても、学習の基盤となる資質・能力として、受け身的ではなく主体的に学んでいく姿勢が求められるようになった。

## （２）情報モラル教育の現状と課題

初等中等教育において、情報モラル教育を実施する上で拠り所となっているのが、2007年に作成された「情報モラル指導モデルカリキュラム表」である。これは文部科学省委託事業「情報モラル等指導サポート事業」において作成されたものである。

この表1は、情報モラルの指導カリキュラムの内容を「情報社会の倫理」「法の理解と遵守」「安全への知恵」「情報セキュリティ」「公共的なネットワーク社会の構築」の5要素に分類し、小中高一貫のモデルカリキュラムとして指導目標を示したものである。

表1 情報モラル指導モデルカリキュラム表

（別紙1）

| 情報モラル指導モデルカリキュラム表  |   |   |   |
|--------------------|---|---|---|
| ＜大目標・中目標レベル＞       |   |   |   |
| 大目標                | 小目標1～2年   | 小目標3～4年   | 小目標5～6年   |
| 1. 情報社会の倫理         | <p>a1-1 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a1-2 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a1-3 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p>                | <p>a2-1 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a2-2 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a2-3 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p>                | <p>a3-1 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a3-2 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p> <p>a3-3 情報社会の発展と生活との関係について理解を深める</p>                |
| 2. 法の理解と遵守         | <p>b1-1 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b1-2 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b1-3 法律の役割と意義について理解を深める</p>                                  | <p>b2-1 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b2-2 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b2-3 法律の役割と意義について理解を深める</p>                                  | <p>b3-1 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b3-2 法律の役割と意義について理解を深める</p> <p>b3-3 法律の役割と意義について理解を深める</p>                                  |
| 3. 安全への知恵          | <p>c1-1 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c1-2 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c1-3 安全への知恵の重要性について理解を深める</p>                            | <p>c2-1 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c2-2 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c2-3 安全への知恵の重要性について理解を深める</p>                            | <p>c3-1 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c3-2 安全への知恵の重要性について理解を深める</p> <p>c3-3 安全への知恵の重要性について理解を深める</p>                            |
| 4. 情報セキュリティ        | <p>d1-1 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d1-2 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d1-3 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p>                      | <p>d2-1 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d2-2 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d2-3 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p>                      | <p>d3-1 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d3-2 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p> <p>d3-3 情報セキュリティの重要性について理解を深める</p>                      |
| 5. 公共的なネットワーク社会の構築 | <p>e1-1 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e1-2 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e1-3 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> | <p>e2-1 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e2-2 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e2-3 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> | <p>e3-1 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e3-2 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> <p>e3-3 公共的なネットワーク社会の構築の重要性について理解を深める</p> |

この表1が作成された頃は、まだタブレット端末は普及しておらず、また、携帯電話が主流で、スマートフォンが発売された時期にあたる。現在

と環境がかなり異なるが、2024年11月末現在、このカリキュラム表は改訂されていない。当時から情報社会の状況も大きく変化してきたので、1人1台端末時代にあったカリキュラム表に修正していくべきといえる。

また、情報モラルの指導内容に関しては、学習指導要領及び学習指導要領解説にも示されているが、指導すべき内容が多岐にわたるため、時間的制約も含め、計画的な実施が困難な状況になっている。特にスマートフォンやSNSの普及に伴い、それらに関連したトラブルが多発しており、学習指導要領に則った情報モラル教育が追いつかず、生徒指導担当や外部講師等による注意喚起による対応が多くなっている現状がある。注意喚起の場合、その場では理解しても、定着率が低いという問題がある。定着率をあげるためには時間をかけ、主体的に学習させる場を設けることが望まれる。

また、一般的に情報モラルの内容は禁止事項を確認し、守らせる指導をすることが多い。このような指導法は危機回避には効果があるが、それだけでは情報社会に主体的に対応できる力を身に付けさせるには不十分といえる。

## （３）情報モラル教育を指導できる教員の実態調査

文部科学省では2006年度から毎年「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」の中で調査結果を報告している。2017年度までは「情報モラルなどを指導する能力」という項目があったが、情報モラルが情報活用能力に含まれることになった2018年度以降は「情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力」という項目に変更され、情報モラルよりもやや広範囲での調査となっている。最新の2023年度の調査では88.1%が「できる」「ややできる」と回答しており、大変高い結果が出ている。ちなみに、「情報モラルなどを指導する能力」の項目で調査した最後の年である2017年度の調査では80.6%となっていた。いずれにしても高い数値が出ているが、この調査は自己申告なので、実際にどこまで丁寧に扱い子供たちに影響を与えているかは不明である。



#### （４）道徳教育と情報モラル

情報モラルが道徳教育に導入されたのは2011年度施行された小学校学習指導要領からである。中学校はその１年後になる。そこでは「情報モラルに関する指導に留意すること」と示された。その後、2015年３月に学習指導要領が一部改正となり、「特別の教科 道徳」として道徳が教科化された。その際、情報モラルの扱いが「留意すること」から「充実すること」に変更され、現在に至っている。

教科化され指導を充実することに伴い、情報モラル教育に関しては、道徳教育により重きが置かれるようになってきた。そのことは学習指導要領解説で取り上げられている内容が以前よりも多岐に渡っていることから確認することができる。

もともと情報モラルは、悪い行為をしない、行為の結果が問われるものであった。一方、日常のモラルは、良い行為をする、行為の動機が問われるものなので、情報モラルの方が求めるレベルは低いものだった。

それが道徳教育の中に組み込まれることによって、情報モラルも日常のモラルのような振る舞いを求めてもよいようになった。ただ、実際の授業でそのことを意識して実践しているところはほとんどないのが現状である。

#### （５）デジタル・シティズンシップと情報モラル

日本では情報社会の問題に関して、情報モラルとして取り組まれているが、2007年以降、諸外国では欧米を中心にデジタル・シティズンシップとして取り組まれている。

デジタル・シティズンシップが、一般社会に向けての能力の育成を求めているのに対して、情報モラルは情報社会に限定し、その中での態度の育成を求めており、理念が異なっている。それはデジタル・シティズンシップのベースがシティズンシップにあるのに対し、情報モラルのベースが日常のモラルにあることに起因する。

内容面では大きな差はないが、デジタル・シティズンシップでは情報モラル指導モデルカリキュラム表にある５要素の中の「公共的なネットワーク社会の構築」に重きがおかれている。一

方、危機回避やトラブル対応等、生徒指導的な内容は含まれていない。

指導法では次のような特徴がある。

- ①ネガティブなマイナス思考ではなく、ポジティブなプラス思考で考えていく
- ②対話や議論する内容を盛り込み、複数の選択肢の中から最適解を導き出すようにしていく
- ③人や立場などによって様々な考え方があり、多様性を認めていく
- ④情報を正しく読み解くため、批判的思考力（クリティカルシンキング）という視点を盛り込む
- ⑤個人の立場からではなく、一市民の立場から考える
- ⑥情報社会特有の振る舞いに落とし込むのではなく、一般社会を意識する

これらのうち①～④に関しては情報モラルとしても扱うことができる内容であり、新たな視点として今後の情報モラル教育の指導法に組み込んでいくべきものといえる。

#### （６）生成AIと情報モラル

生成AIの普及により情報社会は新たなフェーズに入ってきた。生成AIの普及は良いことばかりではなく、それを悪用した偽情報や誤情報の増加が社会問題となってきている。子供たちがそのような情報の被害に遭わないようにするためにはファクトチェックに関するリテラシーの向上が求められる。この内容は情報モラルというよりは情報活用能力に関する内容に思われるが、情報モラル指導モデルカリキュラム表の５要素の中の「安全への知恵」の「情報の信頼性を吟味できる」に相当する。また、この内容はデジタル・シティズンシップの指導法④で取り上げた、情報を正しく読み解くための批判的思考力（クリティカルシンキング）にも相当する。

この生成AIの問題は偽情報や誤情報だけではなく、著作権やプライバシーの問題、差別や偏見など社会的・倫理的な問題もはらんでいるが、内容が高度になっていくので、初等教育で扱うのは難しいのではないかと考える。

## 4. 授業構想

### (1) 対象

本研究では、本学教育学部に在籍する2年生を対象とした必修科目「教育とICT活用」の15回のうち5回の授業を対象とする。実施時期は2024年10月から11月上旬である。

また、分析対象とする学生は全5回全てを履修し、事前・事後調査に回答した42名とする。

### (2) 事前調査

事前調査の中で本研究に関する部分のみを抜粋する。

表2 子供たちのネット社会の問題（複数回答）

| 項目             | N = 42    |
|----------------|-----------|
| ネットいじめ         | 36(85.7%) |
| 誹謗中傷           | 34(81.0%) |
| ネット依存          | 32(76.2%) |
| 個人情報・プライバシーの侵害 | 24(57.1%) |
| 偽情報・誤情報        | 23(54.8%) |
| 金銭に絡む被害・トラブル   | 16(38.1%) |
| 著作権・肖像権        | 15(35.7%) |
| コミュニケーションのすれ違い | 15(35.7%) |
| いたずら投稿         | 13(31.0%) |
| 情報セキュリティ       | 10(23.8%) |
| 情報操作           | 8(19.0%)  |
| 性被害            | 6(14.3%)  |
| 有害情報           | 5(11.9%)  |

子供たちを取り巻くネット社会の問題として認識しているものとしては、良く話題にあがる「ネットいじめ」「誹謗中傷」「ネット依存」が上位を占めた。また、偽情報・誤情報に関しては生成AIの普及により、注目されるようになってきている。

表3 情報モラルの授業をする自信

| 項目           | N = 42    |
|--------------|-----------|
| 授業できる        | 1( 2.4%)  |
| 何とか授業はできそう   | 22(52.4%) |
| 授業する自信はあまりない | 15(35.7%) |
| 授業する自信はない    | 4( 9.5%)  |

本学では主に小学校教員養成を中心としているので、小学5年生を対象に情報モラルの授業を1時間（45分授業）実施する自信を尋ねたところ、「授業できる」「何とか授業はできそう」が過半数を超え、予想外に高かった。

表4 情報モラルの授業をする上での不安

| 項目                     | N = 42   |
|------------------------|----------|
| 情報社会のことをよく知らない         | 8(19.0%) |
| 一般的な児童の実態がよくわからない      | 8(19.0%) |
| どの授業でどの内容を扱ったら良いかわからない | 9(21.4%) |
| どのように授業を進めたら良いかわからない   | 9(21.4%) |
| どのような教材を使ったら良いかわからない   | 8(19.0%) |

情報モラルの授業をする上で一番不安に感じているものを回答させたら、きれいに5等分になった。このことから、どれかに重きをおくのではなく、全ての内容を扱う必要が確認できた。

### (3) 指導計画

事前調査の結果を踏まえると、情報モラル教育を実践する資質・能力を育成するにはまず、情報モラル教育全般に内容を扱う必要がある。これには少なくとも3回の授業が必要となる。

情報モラルに関する知識や情報を得たら、具体的な授業実践に向けての授業が必要となる。先行研究では、ケーススタディで考えさせたり、現職教員による模範授業の視聴をもとに指導案を作成させたりしていた。本研究ではより主体的に取り組ませるために、自ら必要と思われる教材を作成させることにした。教材を作成するには、その前提となる知識や情報が必要となり、3回目までの授業の内容をより活かすことができる。

また、学習者に情報モラルの内容を定着させるためには情報社会の問題に対して、何が問題なの

か、なぜ問題なのか、どうすべきなのか等、主体的に考えさせる場面を意図的に設定することが求められる。そのためには、主体的に考えさせることが可能な教材を提供することができればよいが、場合によっては適切な教材が見つからないこともある。その際に有効に機能するのが自作教材である。自作教材であれば、より意図した流れで授業を進めることができる。

これらのことを鑑み、4回目の授業では情報モラル教材の作成とした。そして、教材を作成する際、教材の中で主体的に考えさせる場面を必ず設けることを条件とした。

5回目の授業では、各自が作成した教材を相互評価する時間とした。様々な視点の教材を閲覧することで、限られた時間の中で効果的に情報モラル教材の作り方の幅を広げられるものとする。

以上のことから、情報モラル教育を実践する資質・能力を育成するために、以下のような5回の授業を計画した。

第1回目：子供たちを取り巻くネット社会の諸問題とその対策

第2回目：情報モラルとデジタル・シティズンシップ

第3回目：情報モラル教材の閲覧

第4回目：情報モラル教材の作成

第5回目：情報モラル教材の相互評価

## 5. 授業実践

### (1) 第1回目

①タイトル：子供たちを取り巻くネット社会の諸問題とその対策

②授業形態：講義

③主な内容

子供たちの間で実際に起こったネットに絡む問題であるネットいじめ、誹謗中傷、ネット依存、いたずら投稿、性被害、偽情報・誤情報を中心に紹介した。また、その対策として、技術的対策、社会的対策、教育的対策について取り上げた。

④考察

本授業は、「情報社会のことをよく知らない」「一般的な児童の実態がよくわからない」を解消

するために行ったものである。

小学校ではいじめ全体に対するネットいじめの割合が実際には2%程度しかなく、予想以上に少なかったことに対する驚きのコメントが多かった。

### (2) 第2回目

①タイトル：情報モラルとデジタル・シティズンシップ

②授業形態：講義

③主な内容

情報モラルで扱う内容、情報モラルの定義、学習指導要領での扱い、情報モラルと道德教育、デジタル・シティズンシップと情報モラルの違い、情報モラルで求められる指導法、具体的な授業実践事例の紹介について扱った。

④考察

本授業は「どの授業でどの内容を扱ったら良いかわからない」「どのように授業を進めたら良いかわからない」を解消するために行ったものである。内容が盛りだくさんで、情報量が多かったので、どこまで理解できたか課題が残った。時間があれば2回の授業に分けたいところであった。

### (3) 第3回目

①タイトル：情報モラル教材の閲覧

②授業形態：実習

③主な内容

一般社団法人日本教育情報化振興会が提供している「ネット社会の歩き方」にあるアニメーション動画教材（2024年11月現在128事例）の中から関心のある3事例を閲覧させた。また、「ネット社会の歩き方」のサイトにある「情報モラルポータルサイト」で紹介しているサイト（2024年11月現在74サイト）から関心のある2サイトを閲覧させた。そして、動画教材や情報モラル関連サイトに関する感想や意見をまとめさせた。

④活動の実際

動画教材及び情報モラル関連サイトの数が多いので、閲覧先は多岐にわたった。

128ある動画教材で最も視聴されたのは、『「推し活」「投げ銭」やりすぎに注意!』で13人(30.1%)で、『うまい話は危険! 闇バイトの罠』8人(19.0%)、『生成AIって万能?』7人(16.7%)と

続いた。

また、情報モラル関連サイトは、文化庁の『はじめて学ぶ著作権』等、著作権移管するサイトが9人(21.4%)で最も多く、文部科学省の『こどもSOS相談窓口』等、いじめに関するサイトが8人(19.0%)、総務省の『インターネットトラブル事例集』6人(14.3%)と続いた。

#### ⑤考察

本授業は、「どのような教材を使ったら良いかわからない」を解消するために行ったものである。様々な教材があることを確認させるうえで、意義のある取り組みと捉えている。

動画教材の選択に関しては、指導者側の立場から選択したというよりは、昨今問題となっている内容に関心が集まっていた。情報社会は目まぐるしく変化しているので、その都度、旬な教材が求められることが再確認できた。

#### (4) 第4回目

①タイトル：情報モラル教材の作成

②授業形態：実習

③主な内容

一般社団法人日本教育情報化振興会が提供している「ネット社会の歩き方」のイラスト教材の中にあるペープサート教材を使って、情報モラルに関する教材を作成させた。

このペープサート教材はMicrosoft社のPowerPointのスライドを使い、あらかじめ用意されているイラストや素材を使って、4コマ漫画のようにストーリー展開して、情報社会の問題を考えさせる教材を作成できるように提供されているものである。

④活動の実際

小学生に授業することを前提に教材を作成するように促したが、難しい場合には中高生や大学・一般向けに作成しても良いことにした。その結果、10人(23.8%)が中高生向け、2人(4.8%)が大学・一般向けに作成していた。

教材のテーマの内訳は表5の通りである。

表5 作成した教材のテーマ

| 項目             | N=42     |
|----------------|----------|
| 金銭に絡む被害・トラブル   | 9(21.4%) |
| 偽情報・誤情報        | 6(14.3%) |
| コミュニケーションのすれ違い | 6(14.3%) |
| ネットいじめ         | 4(9.5%)  |
| 個人情報・プライバシーの侵害 | 4(9.5%)  |
| ネット依存          | 2(4.8%)  |
| 誹謗中傷           | 2(4.8%)  |
| 著作権・肖像権        | 2(4.8%)  |
| いたずら投稿         | 2(4.8%)  |
| その他            | 5(11.9%) |

#### ⑤考察

作成した教材のテーマは、事前に閲覧した動画教材と関連しており、闇バイトや投げ銭などの金銭に絡む問題や、生成AIの普及に伴う偽情報・誤情報の問題を教材にしている割合が高かった。動画を視聴した関係で、ストーリー展開を考えやすかったことが一因としてあげられる。

情報社会の問題を考えさせるようにストーリー展開することを条件としたため、どの教材も何かしら考えさせる場が設定されており、情報モラル教材を作成させる際の大切な視点は押さえられたのではないかと考える。

#### (5) 第5回目

①タイトル：情報モラル教材の相互評価

②授業形態：実習（相互評価）

③主な内容

作成した情報モラル教材をお互いに閲覧し合い、それぞれの作品に批評を書かせた。また、完成度の高い教材を3点以内であげさせ、上位3点に選ばれた作品を紹介した。

上位に選ばれた教材の一例を図1に示す。この教材は、パスワードの管理に関しての葛藤を扱ったもので、身近にも起こりうる教材として高い支持を得た。



図1 情報モラル教材の作品例



#### ④考察

限られた時間の中で効率よく情報モラル教材の展開例を習得させるため、相互評価の場を設けた。これにより、効率よく授業実践の幅が広げられたのではないかと考える。

#### (6) 事後調査

事後調査の中で本研究に関する部分のみを抜粋する。

表6 情報モラルの授業をする自信の変容

| 項目           | 事前        | 事後        |
|--------------|-----------|-----------|
| 授業できる        | 1( 2.4%)  | 3( 7.1%)  |
| 何とか授業はできそう   | 22(52.4%) | 23(54.7%) |
| 授業する自信はあまりない | 15(35.7%) | 15(35.7%) |
| 授業する自信はない    | 4( 9.5%)  | 1( 2.4%)  |

N = 42

情報モラルの授業をする自信に関して、全5回の授業の前後でほとんど変容が見られなかった。個々にみてもみると、11人(26.2%)がアップし、5人(11.9%)がダウンしていた。ダウンした学生に関しては、情報モラル全般に関する知識や指導法を具体的に知り、かえって授業をする自信がなくなったとも考えられる。また、事前と事後で変化がなかった学生は26人(61.9%)おり、そのうち、「授業する自信はあまりない」「授業する自信はない」と回答している学生は10人(23.8%)であった。見方によってはダウンした5人よりもむしろ、変容のなかった10人の方が問題なのではないかと考える。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、まず、教員養成系学部生を対象とした情報モラル教育の授業実践をする上で前提となる情報モラル教育の現状と課題を様々な視点から整理した。

それをもとに、また、学生の事前調査を踏まえ、全5回の授業計画を作成し、授業実践した。

情報モラルに関する動画教材を閲覧したり、情報モラル教材を作成したりする際、最近の出来事に関する動画教材を閲覧したり、情報モラル教材を作成したりする学生が多かった。

教員養成系学部求められる情報モラル教育として実施した授業は、情報モラルの授業をする自信には直接は繋がらず、期待したほどの効果は確認できなかった。ただ、考えさせる教材を作成させることを通して、情報モラルの指導法について理解させることはできた。

本研究では5回の授業で構成したが、さらに授業時間がとれるのであれば、作成した教材を元に



指導案を書かせ、模擬授業まで実施することができれば、より情報モラル教育の授業をする自信に繋がると思われる。

今後もより良い授業実践に向け、授業時間と学習内容について再度検討し、効果的な指導法について追求していきたい。

#### 参考文献

文部科学省，2019年，「GIGAスクール構想の実現」  
[https://www.mext.go.jp/content/20191219-mxt\\_syoto01\\_000003363\\_11.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191219-mxt_syoto01_000003363_11.pdf)  
文部科学省，教育DXの推進について  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/data\\_00008.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/data_00008.htm)  
文部科学省，初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン  
[https://www.mext.go.jp/content/20230710-mxt\\_shuukyo02-000030823\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230710-mxt_shuukyo02-000030823_003.pdf)  
政府統計の総合窓口：統計で見る日本  
<https://www.e-stat.go.jp/>  
西川幸太・山岸芳夫，2016年「大学生の情報モラル教育における体験重視型指導の効果」，コンピュータ&エデュケーション40巻，pp79-84

佐藤和紀，高橋純，安里基子，齋藤玲，吉野真理子，堀田龍也，「教員養成大学における情報モラル教育の講義の実践と評価～ワークシートの学年の違いによる授業設計への自信の変化に着目して～」，2017年，日本教育工学会誌論文誌，41巻suppl, pp41-44  
安里基子，佐藤和紀，高橋純，2019年，「教員養成課程の学生に情報モラル指導法に関する指導を行う際の留意点の検討」，教育メディア研究Vol.26 No.1 pp21-30  
文部科学省，2017年，『中学校学習指導要領（平成29年告示）』  
文部科学省，2007年，「情報モラル指導モデルカリキュラム」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1296900.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1296900.htm)  
文部科学省，2024年，「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm)  
坂本句，芳賀高洋，豊福晋平，今度珠美，林一真，2020年，『デジタル・シティズンシップ』，大月書店  
三宅健次，安藤和弥，川名隆行，吉本一紀，石田剛志，山崎達也，小泉岳央，2023年，「1人1台端末時代に求められる情報モラル指導法の検討Ⅱ」，千葉大学教育学部附属中学校研究紀要 第53集  
三宅健次，2021年，『情報モラル教育からデジタル・シティズンシップ教育へ』，明治図書「道德教育」2022年1月号，pp4-7  
一般社団法人日本教育情報化振興会，「ネット社会の歩き方」  
<http://www2.japet.or.jp/net-walk/index.html>  
(URLはすべて2024年11月30日現在)